
沖田総司の恋

梅小路 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沖田総司の恋

【Nコード】

N1805C

【作者名】

梅小路 葵

【あらすじ】

時は幕末。時勢は傾き、江戸から明治へと変わりつつあった時代。そんな時代の中で、歴史に大きな名を残した者たちがいた。その名も”新撰組”。めまぐるしく動く世にもまれながらも、懸命に生きてた隊士たちである。そんな日々の中で、思ったことは・・・？逆らえない運命の中に芽生えた恋とは・・・？新撰組一の剣の使い手と言われた”沖田総司”を描く恋愛私小説。

第一話

「そんなのじゃありませんよ」

冬の間、固く締まっていた椿の蒼がようやく顔を出し始めた頃、

京には初春の風が薫っていた。

鴨川の水も、薄汚い泥の混じった色から透明な澄んだ色に変わってきた頃である。

一人の若者と男が休息所の縁側で話をしていた。

時折髪をさらっていく風には、心ばかり暖かみがあった。

「先生は本当に心配性なんだから」

そう言った若者はまだ、二十歳くらいに見える。

長身で色が青く、朗らかな笑顔を浮かべている顔には夜の穢れなど知らないような、そんな幼さが感じられた。

「俺は心配性じゃねえ」

もう一人の男

その男は青年よりも十程年上に見える

は煙草を片手に胡坐をかいて座っていた。

髪を後方に纏め、こめかみよりも高い位置でくくっている。

肌の色は青黒く、青年と正反対な切目が、より整った顔を印象付ける。

「俺が言いたいのは、何でも相談してくれないと困る、ということだよ」

男は長い切目で遠く離れたところに見える東寺を眺めて言った。

「土方先生、私には、先生に心配してもらおうようなことはありませんよ」

若者は笑ったが、内心少しとまどっていた。先日の事を思い出して

いたのである。

先日の事、とは後で述べてある。

けれど若者の言葉には、心の曇りなど、微塵にも感じられなかった。逆にいつものような明るい口調だったのである。その声を聞いて少し安心したのか、

「それならいいんだ。何も心配などはしていないが・・・」

そういつつも男はチラリと若者に目を見やった。若者は男と話をしながらも、熱心に修行に励んでいる。手には竹刀が握られていた。

(ああいつているが、納得しているとは思えない・・・)

若者は、自分に向けられた視線を受けて、男の気持ちを感じ取った。そして苦笑紛れに言った。

「土方先生も、私のことなどに気を使わないで、先生自身のことにも気を使われたらどうです。最近、目まぐるしい環境の中で疲れも溜まっていることでしょうし・・・」

若者の言うとおり、最近になって特に仕事が多くなった。芹沢の一件で一段落着いたと思えば、攘夷や薩摩などの浪士たちとの接触が目立ってきて、明日が明後日のように感じられる日々なのである。

暫く無言が続き、男が先に口を開いた。

「そろそろ屯所に戻ろうか」

煙草の煙が広がった。

「ええ」

「あんたはどうする」

男はすでに屯所の方へ、歩きだそうとしている。

「私は・・・」

若者は少し空を見上げた。先ほどまで曇っていた空は光が差し込んでいる。

「私はもう少し残ります」

残る、というのは竹刀のことだろう。休息所の傍らで稽古をするのが、この若者の非番の日課であった。

「そうか。・・・総司」

若者は顔を向けた。

「はい」

「具合が悪いのであれば、医者に通え」

そついい残すと、さっさと屯所へ戻っていった。

「ええ。近いうちに」

(気づかれるはずのない、と思っていたのに。こつもあつさりど気づかれるとは)

苦笑紛れに青年が心の中で思ったのを、男は知らない。

男の名を“土方歳三”。

若者の名を“沖田総司”という。

(総司の奴、最近妙な咳をしやがる)

土方がそう思うようになったのは、年号が「元治」に変わった年の、三月あたりからだった。

鴨川の岸辺に植わっている柳の芽も、だんだんと淡い緑に変わりつつあった。

が、三月だというのに、突然霜の降りる朝が来たりして、京の天気は不順続きである。

そんなある日のことだった。

土方は一番隊を引き連れて、見回りに出かけていた。

一言で見回りといっても、新撰組が街を歩いているのをみると、人々は震えあがった程である。

毎日のように武士や浪人たちを容赦なく斬る姿は、鬼畜のように見えただろう。

その日は、屯所の近くの茶屋で酒を飲んでいた浪士たち、十数名とぶつかった。

相手は名も知らぬような、田舎の藩の者らしい。

新撰組だと知ってか、知らないのか、昼間から酔って、からんできたのである。

「斬る」

土方は真っ先に刀を抜いた。いつ、どこで闘争があってもいいように、刀はこまめに手入れしてある。

この男の几帳面なところが出ている。

ギリリと光った刀と、目の据わっている男を見て、浪士たちはうろたえた。

そんな浪士たちを見て、土方の隣に並んで歩いていた沖田は

「ただの酔っ払いですぜ。ほっときましょうよ」

と、なだめた。

けれども土方は

「無礼極まりない。叩き斬る」

と言って聞かない。

元々、仏や神よりも、自分の生き方を信じているような男だから、沖田が何を言おうと関係ないのである。

それは沖田もわかっていることだった。

結局、沖田率いる一番隊の隊士たちも、抜刀することになった。

何の手負いもせず片をつけた。

相手がどんなに泥臭い田舎者であったとしても、手加減は許されない。

これは隊内の風紀を乱さないようにする為の決まり事なのだ。

局中法度に書いてある。

私事で斬り合いにおよんだとき、相手を斃さず自分のみが傷を負った場合、未練なく切腹すべし

私事で鬭争になったとき、自分が怪我をして負けそうになっても、逃げて帰るなどはしてはならない。

つまり、相手を斃すほか、自分の死をまぬがれる方法はないのである。

恐れをなして逃げた場合、切腹。

武士として、いったん白刃を抜いたのなら、逃げることなど許されないのだ。

近藤、土方らが考えた、厳酷な律令と言えるだろう。

戦国時代の武士たちの律令にさえ、なかったのではないだろうか。

この他にも、様々な隊規があり、恐くなって逃げ出す者もいたが、局中法度の一条に、“土道に背くまじきこと。局を脱することを許さず”

とある。

当然、切腹。

近藤、土方、隊員の非違を聞いたならば、一言目には「斬れ」である。

容赦なく、断首、暗殺、切腹を下した。

新撰組結成以来、死刑になった者の数は、多い。

許され難いことであるとわかっていても、自ら脱走を図る者もいた。

これから先、不安定な世の中での自分の行方が恐くなったのだろう。

隊規を見ても、その様子が伺える。

しかし、武士としても、新撰組隊士としても、半端な覚悟ではやっていけない。

情に心を揺るがされてはならない。

人間の最大の弱みが「臆病な心」であることを、近藤、土方は十分

にわかっていた。

「……………」

土方は道端に倒れこんだ浪士たちには目も向けず、振り返ると無言のまま、屯所の方へと歩き出した。

続いて沖田。

その後に、一番隊の隊員が続く。

人々が恐れ、散ってゆく道を、土方が先頭をきって歩いていた。

その土方の横に、沖田が近づいてきた。

「土方先生」

沖田は明るい若者である。

朗らかな笑顔を浮かべて言った。

「今日、清水の方へ出かけようと思います」

「何でだ」

土方は無愛想にいう。

こういう性分なのである。仕方が無いといえば、仕方が無い。

「あそこにいい茶店があるんですよ」

「そうか」

沖田は無邪気に言った。

「先生も行きませんか？」

「俺が？」

「ええ。久しぶりのいい天気ですし」

沖田は笑った。

「それに、いい俳句が出来ますよ、豊玉宗匠」

からかい半分で言った。

豊玉、というのは土方の俳号で、この男は柄にもなく句を詠むのである。

沖田はそれを、知っている。

というよりも、沖田だけが知っている土方の弱みなのである。

このことは、近藤でさえ、気づいていなかった。

一人で自室にこもり、吟味しているときもあれば、外出時に詠むこともある。

だが、この句がまた、とてつもなく、下手なのである。

これは、素人の沖田が見てもわかることだった。

(この人の頭のどこから、こんな下手な句が出来るのだろうか)

沖田は土方の句を読む度に、可笑しさがこみあげてくる。

しかし、沖田はこんな土方をかわいいと思った。

天性の才能を持って生まれてきたこの男が、句まで完璧だと、どうしようもない。

「俺は忙しい。他の奴らを誘っていけ」

土方はぶっきらぼうに言った。

「そうですか。それは残念だ」

沖田はそう言ったが、全く残念だという顔をしていない。

しばらく二人は黙って歩いていたが、土方が口を開いた。

「それより・・・」

「それより、何です?」

沖田は聞いた。

いつの間にか、口に草をくわえている。

「総司、体の具合はどうなんだ」

「どう、とは?」

「医者には通っているのか」

「それほどじゃありませんよ」

「なに」

土方は横目で沖田を見た。というよりも、少し睨む、といった感じだった。

「いやだなあ、土方先生は」

沖田は、にっこりと笑顔を浮かべた。

「相変わらず心配性なんですね」

先日、池田屋での切り込み騒動があった。

あの有名な池田屋異聞である。

この事件については、前から京で噂になっていた。

長州の浪士たちが、京都に集まり、話し合いを行うつというのである。

目的は、もちろん”攘夷”。

国論を攘夷にもっていこうと、長州の浪士が集まっていた。

その集まり先が、池田屋だったのである。

討ち入ったのは、たったの五人。

そのときの討ち入りの一人が、沖田総司だった。

剣の使い手として有名だったし、隊内でもこの若者に勝てる者は、
そうそういなかったのだから、当たり前と言えはそうかもしれない。
人数で戦えば不利だった、この池田屋での騒動で、新撰組が勝てた
のも

この若者無しでは、難しかったのではないだろうか。

それほどの実力者であり、生まれつきの才能もあった沖田が、池田
屋で死に追いやられたのである。

（死ぬ）

沖田はそう思った。

相手の長州の浪士にやられたわけではない。

「亭主、御用改めであるッ」

そのとき池田屋に駆けつけた隊士たちは、近藤勇ら、合わせて十人。

土方はいなかったが、何故いなかったのかということについては、また他の機会に説明しようと思う。

予定では、会津から援護がくるはずだったのだが、いっこうに来る気配がない。

だんだんと夜が更けていき、あたりが真っ暗になった。

新撰組の頭であり、討ち入りの命令も全てこの男がうけてもっていた。

新撰組局長、近藤勇。

「びびりするよ、総司」

援護がこないのと、京の夏の蒸し暑さに限界を感じていた近藤は、焦りと不安でいっぱいだった。

これ以上、時を待つと長州の獲物を逃がすかもしれない。

だが、たったの十人で、二十人の相手を倒すのには、少し無理があった。

なかなか考えがまとまらない近藤は、横にいる沖田に聞いてみたのである。

聞いて、考えをまとめようとしたのだろうか。

沖田はいつもと変わらない、明るい声で答えた。

「さあ、私にはよくわかりません。

でも、やると決めたからには、命をかけてやりますよ」

近藤は黙っている。

けれど、沖田の笑った顔を見て、決心をつけた。

「よし！今から斬りこむぞ！」

近藤勇は勇者である、と後の世に伝えられているのならば、
このときの判断が大きく関わっているのではないだろうか。

「いいでしょい」

近藤の言葉に、少し戸惑ったものもいたが、

沖田の声を聞いて、皆安心した。

まるで、今から散歩に出かけるような、そんな明るい声だったのである。

（これ以上待つと、大魚を逃がすことになる）

近藤は立ち上がると、低い声で内側を呼んだ。

内側には新撰組監察の一人、山崎丞が近藤の到着を待っていた。

これもまた別の機会に詳しく話そうと思うのだが、

近藤らの討ち入りが果たせたのは、山崎丞の働きが大きく関係していると言っても、過言ではないだろう。

戸の棧を外し、隊士たちを内側へ入れると、山崎は状況を近藤に話した。

「浪士たち十数名、いずれも二階にいます」

「山崎君、ご苦労だった」

言い残すと、近藤は刀を抜き、二階へ続く階段を、いききに駆け上った。

それに続き、沖田、永倉が駆けていった。

永倉とは、副長助勤の永倉新八である。

この男も、そつとこの腕がたつた。

二階での乱闘の中で、沖田はかすり傷一つ受けず、浪士共を相手にしていた。

向かってくる敵を次々と斃し、戦場の真っ只中にいた沖田は、不意に息が止まるのを感じた。

喉の奥がつまり、直後、生暖かいモノが込みあげてきたのである。

体中の力が抜けそうになり、刀を床に刺して身体を支えたが、こらえきれずに、かがみこんだ。

途端、込みあげてきた生暖かいモノを吐いた。

(……血……!?)

見ると、口を押さえていた片方の手の甲に、赤黒い血がべつとりと

ついていたのである。

（もしかすると）

感の鋭いこの若者は思った。

（自分はもうすぐ死ぬのではないのか）

喀血といえば、ただの体調不良ではない。

嫌な予感が頭をかけぬけた。

が、ゆっくり考えている暇もなかった。

ヒュン

と空を切る音が聞こえ、刃の先が沖田の頬をかすめ、わずかだが、髪を切った。

気づかぬうちに、背後から敵が迫っていたのである。

沖田は飛びさがると、下段に構えた。

長い廊下から土間につながっている。

さきほどから、廊下や土間など、一階で刀を交えていた。

細長い廊下では突きで、土間では斬った。

長刀は屋内で戦うのには、あまりむいていない。

短い脇差の方が、使いようによっては有利なのだ。

危機一髪、沖田は土間へと跳ねた。

だが、突然の体の異変についていけず、目が眩むのを感じながら、必死に歯を食いしばって敵に太刀打ちを与えた。

相手は吉田稔麿。長州尊攘派の頭と呼ばれた一人である。

沖田は再び構えを取ったが、相手は絶命していた。

沖田とやりあう前にも、すでに太刀打ちを食らっていたらしく、右肩から股下にかけて血が滲んでいた。

23

あたりはだいぶ静まってきた。

敵の数も、序々に減ってきているのだろう。

二階から飛び降りて、庭に落ち、路上へ逃れようとする浪士たちを外で固めていた隊士たちが斬っていた。

池田屋の土間付近にいた沖田は、二階で戦っている近藤らを助けるようと、駆けた。

が、十歩も歩かぬうちに、またも息が切まった。

顔から血の気が引いていくのがわかる。

さっきは底力というもののなのか、潜在能力なのか、それとも偶然か、若者の腕には力が戻った。

けれど今はそんな力など、残ってはいない。

苦しくなり、胸を叩くと、さっきとは比べ物にならないほどの血が床一面に広がった。

急に力が抜け、沖田はそのまま床に折り崩れ、意識を手放した。

それから数日後。

屯所で医者に見合を見てもらっていた沖田だったが、特に目立って異常はないと言われた。

この若者は、池田屋での嗜血のことは、たれにも言わなかったので

ある。

「返り血を浴びただけですよ」

他の隊士にはそういつて、ごまかしていた。

周りに心配をかけたくない、というのもあったし、もしかすると自分は病気なのではないかと思いつ始めていたからである。

少し熱が出たので、医者に解毒剤を貰い、自室で寝ていた。

二、三日休むと体はずいぶん楽になり、沖田は屯所を出入りするようになった。

なのだが、体が楽になったといえども、完全には回復していないようだ。

時折、乾いた咳をした。

「沖田さん、無理しちゃいけねえよ。風邪はこじらせたら大変だ」

そういつて沖田を風邪だと心配する隊士もいたが、

そのつど、沖田は笑つていつた。

「なに、大それたものじゃありませんよ」

けれども、感づいつていた。

風邪ではないのだといつことを。

(もしかすると、労咳なのではないか)

このことは誰にも言わなかったので、他の隊士や医者も、疑わなかった。

第一、この明るくて朗らかな若者が労咳であることなど、考えてもしなかったのである。

労咳と言えば、治る見込みのない不治の病とされ、家族からもきられた病気だということは、子供でも知っていた。

結核のことである。

が、沖田は隠していたのだが、この男だけには隠し通せなかったようだ。

「総司、お前最近変な咳ばかりしねえか」

屯所のはずれにある、休息所で話をしていたときにも聞かれた。

洞察力にも優れた男である。

新撰組、鬼の副長と呼ばれた土方歳三。

あのあと、

「具合が悪いのであれば、医者に通え」

と言われた。

「ええ。近いうちに」

沖田は言葉を濁した。

その後も何度か薦められたが、笑っているだけだった。

そのうち、土方も忘れたようだ。

一日が一瞬で過ぎていく日々の中で、他人の病気などを気にかけることなど、この男には出来なかったようだ。

そういう性分なのだから、仕方が無い。

もしその場に沖田の義姉である、お光がいたとすれば、引きずってでも医者に連れていったらう。

新撰組の発端である、道場のある江戸から離れ、京に来てから、ちよつと一年が経とうとした。

n
e
x
t
:

第一話（後書き）

こんにちは。昴です。今回初めて、小説を投稿させて頂いたのですがいかがだったでしょうか…。まだまだ、いたらぬ点は多々あるかと思いますが、どうぞ広いお心で見守って頂けたら幸いです。

第二話

沖田は局長室にいた。

見回りで酒に酔った浪士たちを斬った日の午後のことである。

あのと、沖田は屯所で昼飯をとっていた。

自室にお膳を置き、食べていると、ひとつの影が障子の向こうにうつった。

時折話し声の聞こえる中で、静かな足音が聞こえたかと思うと、沖田の部屋の前で止まった。

使いの隊士らしい。

「どつしたのです」

沖田は尋ねた。

この若者は律儀だから、たとえ使いであっても荒く扱ったりはしない。

ちょうど吸物に口をつけていたが、きちんと箸置きに箸を置いて、座りなおした。

「お食事中にすみません」

声からして、どうやら使いの隊士は若い新隊士のようだ。

「沖田先生に御用が有りました」

「なんです」

若い隊士はひとつ、咳払いをすると

「近藤先生から、お食事が終わり次第、局長室へ来るようにとのことです」

「先生が？」

沖田は少し考えた。

(もしかすると、あのこともしれない)

あのことは、池田屋事件で沖田が喀血して倒れたことである。

数日寝込んだあと、調子は回復したのだが、そのかわり妙な咳をするようになったのである。

これも前述したが、これには土方が沖田にしつこいほど心配した。

もちろん、隊内で一番といっても過言ではない、剣の使い手でもあるし、土方・近藤ともに沖田は実の弟のように見ていたのである。

土方も近藤も末の弟だから、沖田のような若者を弟だと思つのも不思議ではない。

新撰組結成以前の付き合いであり、道場でも親しんでいた仲である。

「わかりました」

隊士が去つた後、沖田はすぐに食事を終えた。

もともと食に少ないので、あまり量は食べなかつたのである。

そのためか、剣の腕はいいくせに、二十歳の若者にしては体が華奢な方だった。

自室を出ると廊下を渡り、屯所の南側の奥の部屋、局長室へと向かった。

少し前までは黄色ばんでいた障子が、真っ白な紙に張り替えられていた。

おそらく近藤・土方がいるであろう、この屯所の一角の部屋の前にしゃがむと、

沖田はさわやかな声であいさつをした。

「お呼び仕りました、沖田総司です」

「入れ」

中から、太く通った声が聞こえた。近藤である。

障子をあげると、部屋の中には近藤と土方の他に、誰かがいた。

「……外島先生……?」

薄暗く、かすかに埃臭い畳の上に、思ってもいない人が座っていた。

近藤一同の前に座ると、おどろいた顔で聞いた。

「何故、外島さんがいらっしやるのです?」

外島とは沖田が咯血で倒れたときに見舞いに来た会津藩の公用で、
外島そとしまきへい機兵衛である。

「いや、先ほど外島さんが屯所にいらしてな。この前の件について

話を伺っていたのだが、

せっかくだから沖田君にもお目にかかりたいとのことだ」

この前の件とは、池田屋事件のことである。

近藤が言うつと、外島は軽く会釈した。

沖田もあわてて頭を下げると、見舞いの礼を述べた。

その後、さしつかえのない世間話を半時ほどしていたが、そのうち帰っていった。

途中で沖田は退室を言われたのだが、部屋を出た後、少し話が気になった。

自分のことを言われるのだろうと不安だった気持ちが消えて、少し楽になったが、それでも途中で退室を言われたことが気にかかったのである。

そこで部屋の南側の廊下に立つと、柱に身を寄せてしばらく話を聞いていた。

いわゆる盗み聞きである。

外島が立ち上がる気配を感じ、廊下を去ろうをしたとき、気にかか
る言葉が耳に入ってきた。

「まさかとは思いますが……。京に腕のいい医者があります。そこ
で見てもらってはどうですかね」

(自分の病気のことではないか)

うっすらと気づいていたので、自分のことを近藤や土方に告げたの
だろうと思った。

「ありがたい。ええ、いずれ・・・」

「はい、いずれ・・・」

外島が部屋を出たとき、すでに沖田は廊下から消えていた。

n e x t
...

第二話（後書き）

第二話、お読み下さってありがとうございます。『指摘・指導』、感想などありましたら、教えて頂ければ幸いです。

第三話

その日は少し風が強く、屯所の前を歩く人々は皆、着物の裾を揺らしながら歩いていった。

自室の障子から、ひよこつと顔を出していた沖田は空を見上げていた。

沖田の自室の近くには、ちょうど松の木がある。そこから見える江戸の空には、怪しげな雲が広がっている。

(どつしよつか)

沖田は悩んでいた。医者のところへ出掛けようか、行くまいか、である。

あれから数日たって隊内は日々忙しくなっていたが、鶯うぐいすの鳴く声は相変わらずだった。

今日は非番だったが、沖田は朝から竹刀の稽古をするわけでもなく、ただ空模様を計っていた。

先日訪ねてきた外島そとじま（会津藩公用人）から聞いたところ、屯所から一刻ほど歩いたところに、ある町医者がいるという。

そこについて様子を見てもらえばいい、と勧められたのだ。沖田自身、正直いうとあまり医者が好きではなかったし、どうも気がすまなかった。

けれど勧められたのだから少し行ってみようと思った沖田は、こっそり行くことにしたのである。自分の体のことに多少の不安があったのは言うまでもない。

土方、近藤にはとてもでないけれど言えなかった。心配を強いるように、この若者にはいやだったのである。

しばらく空を見つめて案じていた沖田は、すくつと立ち上がると私服の羽織を羽織って屯所の門をくぐった。

どこへいく。

とは誰も聞かない。にっこりと笑って「ちよつとそこまで…」と言いつつ残して去っていった沖田には、不安など微塵も感じられなかった。

それほど、明るくて自然な振る舞いだった。

沖田は屯所を出ると四条通りへ出た。四条通りの向こうには小さく東寺が見え、それまで曇っていた天気が急に晴れだした。梅雨前の気候とは、不安定だが…

風が冷たくないように、一枚多く羽織ってきた羽織の下は、もうすでに汗ばんでいる。

屯所を離れるにつれ、沖田の足は物憂げなものになっていく。ときどき、神社の鳥居の影になってやすんだり、茶屋で一息入れたりしながら、烏丸通りからすまじのちに出た。

四条通りに面した東側の角に、大きな屋敷が二軒、隣り合わせに並んでいる。

片方が“芸州広島藩”、そしてその東隣りが“水口藩”である。

(水口藩の屋敷の東隣りの建物だと聞いたが…)

暮盤の目になった通りを歩き、ようやくそこまで来たとき、沖田は少しためらった。

(どうしようか…)

この若者は小さいころから人見知りで、未だにそういうところがある。医者嫌いというものも、これが原因のひとつでもあった。

門の前でうろろろしている沖田は、黒塗りの塀からのぞいている青葉に目がいった。

まだ若い葉から木漏れ日が漏れている。石畳に降り注いでいる陽の光を受けて、楓の葉が透き通る緑に見えた。

幼い頃を武州で過ごした沖田には、京の緑があまりにも懐かしくて、大好きなのである。思わず、武州での情景が目には浮かんできた。

そのとき、後ろで声が聞こえた。振り向くと、小さな袋を手にした

娘が沖田を見ていた。

外出から帰ってきたと思われるその娘は、淡い紫陽花の柄の入った着物を着ていた。

げげんそうにこちらを見ながら、娘は沖田に話しかけた。

「あの…何かごようでございますか」

武家育ちなのだろうか、やわらく明るい言葉が沖田の緊張をほぐした。

「あ、いえ。別にそんな…」

沖田はあわてて数歩、引き下がった。医者に診てもらったつもりで来たのが、ここまで来てためらったのである。

不思議そうにこちらを見ている娘の視線から目を離すと、足元に目をやった。どう答えればいいのか、とっさに思いつかなかったのだ。

「患者です」と一言いえばいいのだが、果たして自分はどうするべきなのか、考えようとしていた。

どもる沖田に、娘も戸惑っていたが、くすりと微笑うと沖田のそばにきた。そして、門の前で戸惑う沖田に手で仕草を示した。

「
びんぞ」

沖田は頬の辺りを赤く染めると、軽く頭を下げ、門をくぐった。

小さな中庭がある。奥へと続いている石畳の上にふたつの影が映った。

「すみません。その…患者です」

さつき黒塗りの塀から見えていた柳の青葉が風に揺れている。沖田は後ろを歩いていた娘に振り返って言った。

言いそびれたのが恥ずかしかったのか、それとも娘に話しかけることが恥ずかしかったのか、沖田は少し照れていた。

娘はうつむき加減で沖田の後をついていっていたが、顔を上げると微笑って頷いた。

娘の名前を、“お房^{ふさ}”と聞いた。

縁側に面している部屋に通されると、間もなく奥から白髪の混じった老人が来た。沖田は一人で医者に来たことが初めてだから緊張した趣で座り直した。

医者は“半井^{なからい}玄節”といい、先ほど老人だといったが歳は五十半ばだという。蓄えた白髪混じりの髪が、歳が老けてみえる第一の印象だと沖田は思った。

どんなことを聞かれるのだろうと内心、冷や汗をかいていた沖田に半井は世間話を始めた。ゆっくりと話すその口調に、沖田は少しずつ落ち着いてきた。

他愛もない話に相槌を打ちながら、沖田は少し疑問に思うことがあった。

縁側につるされた小さな灯籠を見ながら、何故か会津藩のことを話すのである。

沖田は新撰組だから会津藩との関わりも少なからずやあるし、むしろ会津藩と手を組んでいるといってもいい。

けれど沖田自身は武州出身で会津生まれではないから、腑に落ちないと思いつつも茶をすすっていた。

しばらくして話が一段落ついたときに、半井は外島の話を持ちかけた。

「外島さんから聞いていましたがね、会津藩の御家中ですな」

一瞬、沖田の頭の中でどういふことが考えたが、すぐに笑った。

「ええ」

何故、外島が沖田を新撰組隊士だといわなかったのか。勘の鋭いこの若者は気づいた。

京において、新撰組がどういふ目で見られているか、沖田は知っていた。もちろんどこにいつても新撰組の名は恐れられていたが、それとは別の感情があるのを知っていたのである。

それは何かと聞かれても困るが、千年以上も都が置かれた“京”という街には、他のところにはない“文化”がある。土方はそれを好まなかったが、沖田には新鮮ですてきなものだと思えた。

だから外島はそのことを思って“会津藩の御家中”という紹介をしたのだらう。

「で、どういう具合なんです」

半井は訪ねた。診察にとりかかると、途端に口をもごもごさせる沖田から様子を聞いて、半井は驚いた顔をした。

「なに、血を吐いた…？」

手元の診察書に筆をおくと、沖田の目をじっとみて聞いた。

「それはどこで」

「えっと…」

沖田は返答に困った。まさか、池田屋に乗り込んで、ばっさばっさと人を斬っていた途中だとは言えない。

「……地元の道場で……」

「ほお」

「稽古をしていたときに」

「ああ。稽古ですか」

「はい」

適当な答えを探して言った。すると半井は、

「それなら、さっさとおやめさない。それが一番だ。私も若い頃、稽古をしたことがあるが、あんな埃くさいところでやるのは無理だ。とくにあなたのような体では」

「ええ…」

沖田は小さく頷いた。

「それに、そんな細い体で大した力があるわけでもないのだから、やめてしまいなさい。さらに悪くなるのはいけない」

半井は手元にある薬箱から、小さな紙袋を取り出した。

「薬は差し上げましょう。風通しのいい、明るいところで寝なさい。薄暗いところで寝るのならば、いっこうによくならない。いいですか？」

「はい」

(果たしてそんなことが自分にできるだろうか……)

だが沖田は笑顔で頷いた。

「そのとおりにします」

帰り、門のところでお房がいた。しゃがんで紫陽花に水をやっている。

改めてお房を見てみると、少し丸顔で、まつげがきれいだった。形のいいあごをもっている。

沖田の気づくと小さく会釈をして、石畳の奥の母屋へ消えていった。半井から受け取った小さな紙袋を手に握ると、そのまま屯所へ帰った。

陽の光がまぶしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1805c/>

沖田総司の恋

2010年10月9日01時11分発行